

この「維摩詰」の語に対し、『維摩経』解釈の基調とされる『注維摩詰経』を見ると、鳩摩羅什と僧肇の「浄名」、竺道生の「無垢称」と意識語に二種があり、また僧肇は維摩詰を法身の大士と定義したことが注意されるが、特に僧肇の釈に見られるような仏身論における位置づけは、後の解釈に大きな影響を及ぼしている。

次に浄影寺慧遠の『維摩経義記』では、旧説の二種の意識を「浄名」を正翻、「無垢称」を傍翻として会通する。また維摩詰を法身とすることや「権化無方」といった表現は僧肇釈を踏襲したものと言えよう。また、慧遠の釈については嘉祥大師吉蔵の中に影響が見られることは留意すべき点である。その吉蔵の釈には真諦や廬山慧遠の弟子とされる曇詵の説が紹介されるところが新しく、また三論教学らしく「独立名字」として解釈するなどの独自性が見られ、更に本迹論を適用する点などは僧肇の『注維摩詰経序』に見られる思想の継承と考えられる。ただし、前述の如く、「示同塵俗而心栖累表」といった句や浄徳を強調する文脈からは、慧遠の釈を参照した可能性が窺われる。

これらに比し、智顗の説では旧説を継承する面を持ちながらも、その中心は誤読を積極的に用いた独創的な解釈にあった点が特徴的であった。智顗は意識語として「浄無垢称」という語を「浄・無垢・称」と三分することにより、三身説や三観、三智などに対応させ用いるが、そもそも「浄無垢称」は Vimala が重複したものであり意味として適切ではない。更に、「称」を名詞ではなく動詞に取り、「称機（機にかなう）」などと用いる。このような用法により、智顗がこの語に菩薩の教化の意義

を見出し積極的に用いた意図が看取されるのである。このような理解は、漢字そのものに立脚した結果であることは明らかである。宋代に編纂された『翻訳名義集』には、維摩詰の語釈をする中、智顗の法統を嗣ぐ智円の説を用いつつも、その元となつたはずの智顗の説が紹介されなかったことに明らかな通り、智顗の語義解釈は天台教学の範囲では他の概念との有機的な構造を構築する上で意義が高かったが、言語学的には矛盾が多いため、それが一般的な解釈として受容されるには至らなかったようである。ただし、それ自体には意味を持たない語を、教学体系の中に組み込むことで積極的に意味を付加した結果、宗教的な意義にまで昇華させるほどの解釈を残したという意味において、智顗の説は非常に興味深い。

羅什から慧遠、智顗、吉蔵たちまでは約二百年の時間的差があるが、我々は「維摩詰」に対するこれらの解釈を比較する時、その間に確立した教学を背景として、単なる語義解釈からの脱却、そして主体的な解釈への試みた中国仏教の発展の軌跡を看取するのである。

中国における菩薩戒について

久 田 静 隆

大乘教典の中でも古いものの中では、大品般若経で無所得空の立場で十善道を実践することが戒波羅蜜であると説き、また

第11部会

十善道による衆生の教化が説かれており、自ら守り人に教え教化するという自利利他の両者を兼ね備えた大乘戒としての特徴が見られ、五戒や八齋戒といった在家信者に対する戒が菩薩の実践として説かれていることから、大乘戒は、大乘の修行と深い関わりを持ち、僧伽を離れて在家菩薩としてこれらの戒を實踐していたことを推察することができる。しかし、この五戒や八齋戒は戒波羅蜜の説明ではなく、十善道こそが菩薩の實踐する戒波羅蜜であると説かれている。

十善道こそが菩薩の實踐する戒波羅蜜であると説かれたのと同じように、菩薩の修行と悟りへの段階を結びつける華嚴經や十地經においても、清淨戒において十善の内容を明らかにし十善道の實踐を説いている。十地經・華嚴經十地品においては三聚淨戒という明確な表現は見られないが、十地經の注釈書である十地經論では、この清淨戒を發起淨と自体淨の二種の淨から説明し、自体淨について、「離戒淨」「攝善法戒淨」「利益衆生戒淨」の三種の性格を明らかにし、離戒淨が離殺生から正見までの十善であって、これを受戒淨と呼び、十善道を戒として受けるべきものとして捉えており、大乘の早い段階では三聚淨戒の内容が十善戒で理解されていたことが伺われる。

華嚴經十地品では十善道を修するものの、三界を怖れ、大悲心を起こさない場合は声聞乗のものとなり、自ら悟りを得たものの大悲の方便力を欠く場合は独覺乗のものとなり、一切の衆生を救済するために善巧方便をめぐらし、大悲憐愍の心をもって十善を行ずるものを菩薩乗とし、全ての善を含むという意味で、これを十地經論における攝善法戒淨とし、さらに、十不善

道によって地獄餓鬼畜生の三惡道に墮ると説き、さらに十不善道のそれぞれの性格を明らかにして、菩薩が自ら十善道に安住することなく、一切衆生を十善道に導き入れることを、十地經論における利益衆生戒淨としている。

従来、善業・善業道としてとらえられてきた十善が戒波羅蜜の中心としておかれ、また三聚淨戒の攝善法戒や攝衆生戒という考え方にも表れているように、大乘においては戒を禁止という消極的なものではなく、積極的な修善という意味としてとらえていたと考えられる。

雑誌 CEM に見る

現代「アレヴィー」思想の変化

佐 島 隆

トルコ共和国に「アレヴィー」という問題群は以前から知られてはいたが、一九九三年のマドマク事件が契機となり、アレヴィーとは何かという関心が社会的に表面化した。アレヴィーという集団は、スンナ派イスラームが対立概念とされるが、シーア派ではない。しかもアレヴィーは、それに関する研究者によっても異なるが、組織、団体、協会、ワクフ（財団）などによっても異なる、多様性を持つ。

そこで、ここでは、アレヴィーがイスラームの中にあるのか、外にあるのか、という議論を中心に、特にジェム・ワ